

2022

6

令和4年6月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻346号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

# とあ言おう



さわやか福祉財団

# 地域共生社会づくりを 共に目指して

## 公益社団法人 日本プロサッカーリーグ

さわやか福祉財団は、任意団体として活動を始めた当初より、公益社団法人日本プロサッカーリーグ（Jリーグ）様より多大なご支援をいただいております。

5月26日（木）、全国のさわやかインストラクターや地域活動関係者が一堂に会して実施した、ブロック全国協働戦略会議の場にJリーグの野々村芳和チェアマンをお招きし、寄付金目録授与式と、当財団からの感謝状贈呈式を行いました。



## 感謝状

公益社団法人 日本プロサッカーリーグ 様

30年の長きにわたり  
ふれあい社会づくりに貢献いただき感謝します  
2022年5月26日



公益財団法人 さわやか福祉財団  
代表 堀田 力 理事 清水 肇子



ほりたけ 高田けんえい

贈呈した感謝状

今後のJリーグ様のますますのご発展と、選手の皆さんのご活躍を心よりお祈り申し上げます。



野々村チェアマンから寄付金目録を頂戴し、当財団より感謝状を贈呈しました

# さあ、言おう

2022年6月号

## CONTENTS

### 2 新しいふれあい社会 実現への道

## 「シャレン」で地域に笑顔を！

Jリーグの社会連携活動

清水 肇子

### 4 広げよう つなげよう 地域助け合い 挑む！ 我らの地域づくり

## 自分たちで地域を良くしていこう

住民の活動をSCが後方支援

茨城県つくばみらい市

### 11 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

## みんなで大きな絵を描き

地域の新しいカタチを創造しよう

NPO法人鶴ヶ島第二小学校区地域支え合い協議会（埼玉県鶴ヶ島市）

### 17「地域助け合い基金」助成先のご紹介／状況のご報告

### 22 連載 17 老いの暮らしを創る

## 終の棲み家に翔びました

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

### 新しいふれあい社会づくりに向けて

● 新地域支援事業・  
助け合いの地域づくり

26 北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など

29 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・ご寄付者の皆様のご紹介

①「基金」ご寄付のご案内

②『居場所ガイドブック』・「新・助け合い体験ゲーム」のご紹介

③みんなの広場 / 投稿募集

④さわやかパートナー・『さあ、言おう』のご案内 / 表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと ● 高橋 紘士

# 「シヤレン」で地域に笑顔を！ Jリーグの社会連携活動

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

皆さん、「シヤレン」という言葉を見聞きしたことはありませんか？

これは、Jリーグが率先して推進している「社会連携活動」のこと。地域の課題や社会的なテーマを踏まえて、Jリーグと全Jリーグクラブが連携して取り組んでいる。

現在、全国40都道府県に、J1、J2、J3のカテゴリーで58クラブがあり、多彩なシヤレン活動が各地で展開されている。社会連携活動というとおろ、地域の住民をはじめとして多様な主体と協働しながら実施しているのが特長だ。もちろんJリーガーも積極的に参加している企業、団体、自治体、学校、NPO、PTA、地元の飲食店や農家、病院：等々、その地域の様々な人や組織と一緒に課題に向き合い、共に実践していく。JリーグとしてSDGsへの貢献でもあり、まさに地域に元気といきがいを生み出し、魅力あるまちづくりへの取り組みとして広がっている。

去る5月10日には、「2022 Jリーグシヤレン！アウォーズ」がオンラインで開催された。今年で3回目となるこのアウォーズは、特に社会に広く共有したい活動を表彰するもの。20

21シーズンには2000を超える活動が行われているというが、そのうち各クラブからエントリールされた活動の中から決定された受賞者が当日発表された。

表彰は、「ソーシャルチャレンジャー賞」「パブリック賞」「メディア賞」の3つ。このうち、「ソーシャルチャレンジャー賞」の選考に関わらせていただいている。ソーシャルチャレンジャー賞は、まさに地域の社会課題を皆で解決に向けてチャレンジしていることが最大のポイントになる。今回は、「いわてグルージャ盛岡」と「FC琉球」が受賞した。

いわてグルージャ盛岡は、ゴミの削減をテーマとしつつ、得た堆肥を米作りに活用し、できたお米を子ども食堂へ寄付し、居場所づくりを進めるなど、地域の複合的な課題に向き合い、解決に挑戦している取り組みだ。FC琉球は、地元産品を活用したお弁当の開発から販売、その「琉球応援弁当」の子ども食堂への寄付と子どもたちとの交流などを積極的に実施し、コロナ禍による深刻な打撃で苦しむ地域に寄り添う姿が希望を与えている。

毎年各クラブの活動資料を拝見させてもらっているが、決して派手な単発イベントに終わらず、Jリーグの理念どおり、地域に根ざしたすばらしい活動が地道に展開されている。ひきこもりの青年や精神障がいの方と農業などを通じてふれあいながら社会復帰への道筋を応援したり、地域から敬遠されがちな少年院を訪れて、少年少女と交流しながら社会の偏見や差別の解消にも貢献している取り組みなど、もっともっと社会に知ってほしい活動もたくさんある。Jリーグでは一緒に取り組めるアイデアを常時募集もしている。

助け合いの仕組みをつくる生活支援コーディネーターも地域の方々も、地元のチャレン活動とつながってみてはどうだろう。共に悩み、共に喜びながら取り組む課題解決へのチャレンジは、必ず地域に笑顔を生み出し、活力を与えてくれるはずだから。



# 自分たちで地域を良くしていこう 住民の活動をSCが後方支援

## 茨城県つくばみらい市

茨城県つくばみらい市では、市を挙げて生活支援体制整備事業を推進。

「自分たちの住む地域を、自分たちで良くしていこう」と活動を始めた住民と、地元の一住民であり、経験豊富な社協職員でもある生活支援コーディネーター（SC）の後方支援を取材しました。

（取材・文／塩瀬 潔泉）

2017年4月、つくばみらい市で がいにくいことを痛感していました。

は同市社会福祉協議会の松尾好明さん ですから、住民主体で進める生活支援体制整備事業には、「自分たちの住む

（49歳）がSCに就任した。

「これまでの社協の事業で、住民さん 地域を自分たちで良くしていこう」と  
お願いして参加してもらう活動は広 いう気持ちで参加してもらえるように

支援しよう、と思いました」

松尾さんは、東京の大手コンビニエーン本部に勤務した後、故郷・伊奈町に戻り、社協に入職。以来、25年勤務するベテラン職員だ。

同市は、旧伊奈町と旧谷和原村が合併して06年に誕生し、現在人口約5万2000人。合併前年には東京・秋葉原から茨城県に「つくばエクスプレス」が開通し、同市にも「みらい平駅」が誕生した。それまで農業地帯が中心だった同市だが、みらい平駅周辺は都心のベッドタウンとして急速に発展し、



つくばみらい市の生活支援コーディネーター、松尾さん

この地区だけで人口は1万人を超える。同事業については16年から関係者が検討を始めたが、これまでにない「住民主体」をどう進めればよいかを当財団に相談。行政の担当課や社協全職員が集まって当財団の研修を2度受けた。研修を踏まえて、松尾さんは他の県や市町村の情報等も収集。行政や、社協で受託している地域包括支援センターと話し合いを重ね、「いかに住民が入ってきやすい形をつくるか」を一番に考え、働きかけを開始した。

住民主体のために  
「お願いします」と言わない

松尾さんたちは、まず第2層協議体

を編成するために市内を5圏域に分け、住民フォーラムからスタートすることにした。

開催の告知は、市や社協の広報誌への掲載やチラシの配布もしたが、それ以外に、松尾さんたちが知っている民生委員やサロン関係者、若手のボランティア活動者などには案内文を直接郵送した。そして、ぜひ興味を持ってもらいたいと思う人には関係者で電話をかけたが、ここでも、お願いするのはない、ということを皆で確認し合っただけだ。電話では「興味があったら来てくださいね」と言う程度に留め、自発的に参加してくれることを期待したという。

住民フォーラムには、各圏域30人ほどが参加した。その後の2回の勉強会にも、フォーラムから引き続き20人程度が参加。「助け合い体験ゲーム」で勢いも付き、協議体発足となる次の日は参加者同士で自由に決めてもらっ

た。多様な住民の集まりで、どう進んでいくかわからない協議体を、SCは議題を提示したり役割を担ったりして支援したくなるが、松尾さんたちは、協議体のあり方をすべてメンバーに委ねてきた。

「集まると皆さん、最初は雑談をされていましたね。そこから例えば、メンバーの民生委員さんが地域の身近な困りごとについて何となく話し始めて、



当財団も協力した勉強会での「助け合い体験ゲーム」の様子

そうすると他の方々も自然に『それでどうしたの?』と興味を持って話が広がっていきました。次にいつ集まるかなども、全部皆さんが決めていました」

### みんなで立ち上げた食堂 新たな目標を協議体で話し合う

#### 空き家を

高齢者や子どもたちの居場所に

第2層協議体の一つである伊奈東協議体に、地域の空き家を使わせてもらえるという情報が入ったのは、18年11月頃。協議体で話し合った結果、少し前から話題になっていた子ども食堂を自分たちもやってみよう、ということになった。

昼間の時間帯は、主に高齢者がくつろげるカフェ。夕方からは子どもやその親のための子ども食堂とし、名称は「ほっこりカフェ&子ども食堂」。どちらの時間帯も食事を安価で提供し、月1回開催することにした。

調理は、地域のサロンを拠点に活動していた元<sup>\*</sup>食生活改善推進員(食改)の人たちに相談すると、5名が参加してくれることになった。そのうちの一人で、協議体メンバーでもある鈴木和枝さんは、最初の住民フォーラムから興味を持って参加してきた。「これまで、家族を地域に支えてもらった、という思いがありました。子どもも大きくなったら、地域に何か恩返しができるかと思っていた時期だったので、住民フォーラムに参加しました」

調理と、食材調達も担当するのは橋本民子さん。

「食改は、栄養があって身体に良くて、家庭で普段食べないようなものを作ります。自分の家の食事よりもカフェ&子ども食堂のほうが頭がいっぱい、とい

うくらい献立は考えているんですよ(笑)」  
作り手が思いを込めて丁寧に作った食事は、初めて食堂に来たときはストレスのせいかな



鈴木さん(左)と橋本さん  
カフェ(左)と食堂の様子



機嫌そうだった母親を、食事を終える頃には笑顔にさせるという。

「その親子は、バーベキュー大会にも来てくれたよねえ」とお二人はうれしそうに顔を見合わせる。

「食事は、ただ命をつなぐだけではなく、人が幸せを実感するものなんですよ」と橋本さんはしみじみと語る。

\*食生活改善推進員 健全な食生活を実践することを目的に、地域で食育活動等に取り組むボランティア。

### 地域の厚意に支えられ コロナ禍を乗り越えて

コロナの感染が拡大した時期には、お弁当を取りに来てもらう形に切り替えて続けられたカフェ&子ども食堂の活動。それまでの利用者以外にも、閉じこもりがちな人への民生委員の声かけや、「隣近所の一人暮らしの人の分も」という希望者が増え、30食から一時は70食作ったこともある。

食べている人たちの笑顔が見られず寂しかったが、お弁当を食べた人たちが「おいしかったよ」と電話をくれたり、外でみんなでお弁当を食べて楽しかった、といった感想が寄せられたことが大きな励みになったそうだ。

「以前からいろいろと趣味はありましたが、それで楽しいのは自分だけ。来てくれる人たちが食事をして笑顔になり、『ありがとう』と言ってくれる喜びは、趣味では得られません」と橋本さん。カフェ&子ども食堂に関わって以降は、協議体にも参加している。

「協議体で地域のいろいろな課題が分かり、私たちにはやるのがまだまだいっぱいあるなあ、と思うようになりました」

SCの松尾さんにとっても、カフェ&子ども食堂立ち上げは思い出深いものとなった。

「家の片付けや準備では、本当に皆さん頑張っついていました。協議

体での話し合いから初めて形になった活動でしたし、私も初日は、『人が来てくれるんだろうか』とドキドキしていました。でも、昼間はおじいちゃんおばあちゃん、夕方からは子どもたちもたくさん来てくれて、本当によかったと、ホッとしました」

空き家の水道の水漏れは男性のボランティアグループに修理してもらった、松尾さんの知り合いの電器店は、中古のエアコンと冷蔵庫を提供してくれた。また、オープンしてしばらくすると、ケアマネジャーである家主さんが2階で事業所を開業することになり、食堂が使用した水道光熱費も持つてくれることに。この家主さんは、オープンに際してガスコンロも新調してくれたそう。野菜などは地元の複数の農家が差し入れてくれるが、用意できる物を前もってLINEで知らせてくれるので、橋本さんも献立を考える上で非常に助かっている。

予算は決して潤沢ではなく苦勞も多  
いが、多くの厚意と訪れる人たちの幸  
せそうな笑顔に支えられ、カフェ&子  
ども食堂は住民の居場所となっている。

— 今後の展開を協議体で話し合う

今、伊奈東協議体で話し合われてい  
るのは、カフェ&子ども食堂に学生ボ  
ランティアにも参加してもらうにはど  
うするか、というテーマだ。

「今の時代、塾に通うのが当たり前の  
ようになっていきますが、食堂に来る子  
たちみんながそういう環境にいるわけ  
ではありません。食堂で宿題をやっ  
ている姿を見ると、学生さんも来て、  
子どもたちに勉強を教えてくださいら、  
と思うようになりました。もちろん食  
事付きですから、悪くないと思うん  
ですよ（笑）」と橋本さん。

協議体での話し合いから地域の皆が  
協力して立ち上げ、コロナ禍でも柔軟  
に継続してきた、ほっこりカフェ&子

ども食堂。そして、そこで浮かび上  
った新たな目標が協議体にフィードバ  
ックされ、話し合われている。学園都  
市も近いこの地で、新たな展開もきつ  
と見られるだろう。

\* \* \*

同市では、伊奈東にカフェ&子ども  
食堂ができたことで、他の4圏域でも  
子ども食堂が誕生している。さらに伊  
奈東では、2軒目の地域食堂が今年5  
月11日にオープンした。

未来につながる  
移動支援ボランティア  
「絹のかご会」発足

— 楽しく元気ならいいけれど…

昨年4月に活動を開始した移動支援  
ボランティア「絹のかご会」は、つく  
ばみらい市絹の台地区の老年クラブ

「絹けんわかい和会」の会員で結成された。メン  
バーの北原陽一さん（65歳）は、定年

退職後も週2回仕事をしながら、市社  
協の配食や運転ボランティアなどに積  
極的に参加。会長の中村公悦こうえつさん（72  
歳）も、北原さんと一緒に自治会役員  
をやったときに誘われ、共にボランテ  
ィア活動をする仲間だ。

中村さんは、大手鉄鋼メーカーに勤  
務していた50代の頃、アメリカ中西部  
に赴任。そのときに見た車社会の現実  
がずっと心に残っていたそうだ。

「アメリカでは私も車で移動していま  
したが、あるとき、支え合ってやっ  
つとで歩いている老夫婦がハンパー  
ガーシヨップに入って食事をしていま  
した。帰りは誰かが車に乗せていくの  
だろうと思ったら、何と奥さんが車を  
運転していったんです。その様子を見  
て、車がないと生活できない社会とい  
うのは年を取ったら大変なんだ、と思  
いました」

その後、日本に戻って都内への通勤  
などには電車を利用していましたが、60代

## ミ ノ ハ ウ ス 居場所「MINO-house」

小絹協議体に、空き家を提供してもらえるとこの情報は2021年3月。家主の女性が、夫の実家であるその家を、「自分たち夫婦と一緒に、みんなで楽しく集える場にしたい」と申し出てくれたのだ。

協議体に当初から参加しており、子どもが通う小学校ではPTA会長を務めるなどさまざまなボランティア活動にも携わってきた高木貴子さんは、居場所立ち上げに協力し、ここを自身が会長を務める「手話サークルすずらん」の活動場所とすることをメンバーに提案した。

「以前は、スーパーのフードコートと地域のコミュニティセンターで月1回ずつ集まっていました。フードコートは、通りがかりの人たちに活動を知って興味を持ってもらうのにとっても良かったのですが、コロナで使用できなくなって。コミセンの部屋は、どうしても会議のような雰囲気になってしまうので、ミノハウスで集まれるようになって良かった」と高木さん。サークルメンバーはリビングに集い、時折手話を交えながら談笑する。堅苦しくない交流の中で、1人でも多くの人に手話を身近に感じてもらえたら、というのが高木さんの思いだ。

家主の女性は茶道の師範で、季節を楽しむのが好きな人だ。庭や床の間には四季折々の花があり、訪れる人に話題を提供する。庭にはピザ窯も造られており、みんなでピザを食べて楽しむこともある。

「ここへ来ると、夫が本当にうれしそうな表情を見せてくれます。これからいろいろな人たちの交流に使ってもらえたら」と家主の女性は語ってくれた。



居場所「MINO-House」  
(右)と、すずらん会  
長の高木さん



半ばに勇退して地元で生活するようになる、やはり車は欠かせない移動手段となった。アメリカでの出来事を覚えていた中村さんは、あるときミニコ

も独自でさまざまな情報を収集し、  
ミ誌で紹介されていた他の市の団地の有償移動支援ボランティアに興味を持ち、現地を訪ねて話を聞いた。ほかに

和会のゴルフ部の仲間や自治会役員と一緒にやった人たちに、移動支援ボラ

ンティアと一緒にやらないか、と声をかけてみると、「自分たちも年を取ったら困るよね」と賛同が得られたそうだ。

「楽しく元気に」というのが絹和会のキャッチフレーズ。でも、年を重ねて元氣じゃなくなったから、と退会してしまう人たちがいるのはあまりにも寂しすぎます。楽しむだけじゃなくて、大きなことはできなくても、みんなを支え合っていけたらそれが理想じゃないかと思うんです」

### 「ずっと支え合える高年クラブに

活動は、まず絹和会で小さく始めてみようということで、今のところ担い手も利用も絹和会メンバーに限定。通院の送迎等を行い、利用は発足から1年間で延べ91人となった。

「自宅のすぐ近くにある診療所までタクシーで行き、『運転手さんに申し訳ないから1000円渡した』という人

もいて、こんなささやかな活動なのに大喜びしてくださるんですよ」と中村さん。

元氣じゃなくなつたから退会した絹和会の元メンバーの中には、絹のかご会のサービスを受けたいと再度入会してくる人もいて、中村さんたちが望む「支え合っ

ていける高年クラブ」に少しずつ近づいているように見える。

絹のかご会も、いずれは高齢化してくる。今のところ担い手は男性だけだが、今後は若い世代の女性にも期待している、と中村さん。北原さんも、

「活動者は絹和会以外でもOKとするなど、今後のやり方はいろいろあるかもしれない」と話す。

絹のかご会による支援の様子



絹のかご会の北原さん（左）と中村さん

中村さんは小絹協議体にも所属しており、今後、情報を共有しながら地域で活動が広がっていくことも期待したい。

\* \* \*

子ども食堂や高年クラブの活動は始まったばかり。もっともっと、たくさんの人を巻き込んで、大きく育つてくれることを楽しみにしたい。

広げよう つなげよう 地域助け合い

活動の現場から



# みんなで大きな絵を描き 地域の新しいカタチを創造しよう

NPO法人鶴ヶ島第二小学校区地域支え合い協議会（埼玉県鶴ヶ島市）

埼玉県鶴ヶ島市では、顔の見える小学校区単位で、住民主体による地域支え合いの取り組みが進んでいます。その先陣を切って設立されたのが、「鶴ヶ島第二小学校区地域支え合い協議会」。事務所は鶴ヶ島第二小学校（鶴二小）内にあり、学校や関係機関、企業、各種団体などとも連携し、たくさんの住民が力を発揮してさまざまな活動を展開。みんなで夢を見ながら、新しいふるさとのために互助の仕組みづくりを推進する、その姿を紹介します。

（取材・文／城石 眞紀子）

防災からスタートした  
住民主体の地域づくり

埼玉県のほぼ中央に位置する、人口

約7万人の鶴ヶ島市。都内の主要駅には8つの小学校があるが、このうちも1時間以内でアクセスできる利便性の良さから、高度成長期に住宅開発が行われてベッドタウン化が進展。同市を越えていて、市内で最も高齢化が進

んでいる地域だ。

「この地域の10の自治会は、従来から鶴ヶ島を中心に、納涼大会や運動会、お祭りなどの諸行事を共に行ってきた。

地域では、進む少子高齢化や核家族化、家屋の老朽化、自治会活動のマンネリ化、実態に対応していない行政の防災施策など、さまざまな課題を抱えていましたが、まずは一番大きな課題である防災から取り組もうという機運が高まり、自治会役員OBが中心

になって2008年に設置したのが『鶴ヶ島第二小学校避難所運営委員会』です。住民が主体となって防災訓練を合同で実施していくなど地域防災に取り組み中、住民アンケート調査では多くの方から『地域のために協力できる』との回答もいただきました。こうした実績を踏まえて、この地域全体で助け合い、支え合う新たな地域づくりを目指して11年7月に発足したのが、『鶴ヶ島第二小学校区地域支え合い協

議会』です」

設立の経緯についてこう語るのは、協議会会長の細貝光義さん（73歳）。

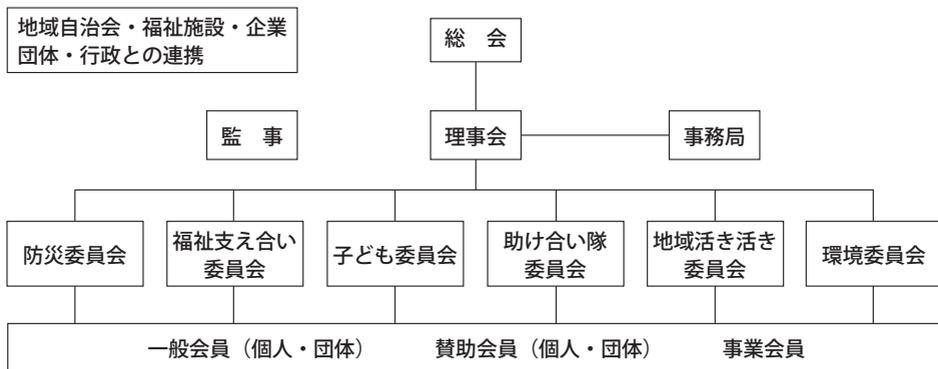
同協議会では、活動の広がりに応え、13年にはNPO法人格も取得した。

「法人化については、当初は私も含めて7割くらいが反対だったと思います。どうして法人化する必要があるのかとでも議論を重ねる中で、最終的には全員が納得して法人化しました。理由は3つありまして、1つ目は責任ある事業活動を行うため。2つ目は助成金を

いただいたりもするので、法の下で徹底した情報公開をして透明性を高めるため。3つ目は、契約や業務委託を受け、事業活動の充実を図るためです」

法人化の後、環境教育施設「eコラボつるがしま」の受付や案内業務、薬用酒メーカー工場跡地の草刈り等の業務を受託。これだけで年間120万円の事業収入があり、安定した運営基盤の確立に大きく貢献しているという。

## NPO法人鶴ヶ島第二小学校区地域支え合い協議会



## 市内全域に広がる 地域通貨「ありがとう券」

そんな支え合い協議会では、各自治会活動で十分対応できない地域課題の解決に、定期連絡会議を開いて自治会と連携・協力しながら取り組んでいる。また行政や社会福祉協議会をはじめ、商店会、PTA、民間企業なども幅広いネットワークでつながり、産学官民一体となって協働。

活動内容としては、「防災」「福祉支え合い」「子ども」「助け合い隊」「地域活き活き」「環境」の6つの委員会があり（前ページ図参照）、ボランティアに対する志や理解のある住民290名が、年会費5000円を納めて会員として参加している。「5000円でこんな楽しいことができるとんだよ」ということで、コロナ禍前には活動委員会6グループ全体で、1年間に延べ1万人を超える参加人数がある

りました」

その中の一つである「助け合い隊委員会」では、高齢者などの生活上の困りごとを有償ボランティアで支え合う活動を実施している。

助け合いには「ありがとう券」を活用。利用者は、1枚でおよそ20分を目安に助け合いを行う「ありがとう券」を200円で購入し、支援活動を行った協力者に謝礼として券を渡す。受け取った券は、支援店（ありがとう券取扱店）での商品・サービス購入時の代金150円として利用できる仕組みだ（差額50円は事務局経費等に充当）。

「ありがとう券は、ありがたうの気持ちの形にした、いわば地域通貨です。市内8地域の協議会には8つの助け合い隊があり、それぞれ発券しているのですね。市内全域の支援店で共通で使用でき、その数は150店以上になります」と

鶴ヶ島助け合い隊 鶴二 No.18682

### ありがとう券

利用会員は助け合い実施後、この「ありがとう券」で「ありがとう」の気持ちを伝えたい  
 ・ありがとう券は1枚でおよそ20分を目安として200円で助け合いを行います。  
 ・ありがとう券は「助け合い福祉推進員店」とスタッフ一機用の店などで利用できます。  
 ◆発行元 鶴ヶ島第二小学校区地域支え合い協議会 TEL049-296-7974  
 本券有効期限

ありがとう券

話すのは、助け合い隊委員会隊長の佐藤幸夫さん。

21年度の実績では、依頼件数197件、活動者数271名。主な依頼は、



助け合い隊の活動の様子（除草、包丁研ぎのサービスも）

植木の剪定や草取り、ごみ捨てなど。

「以前はご主人が剪定をやっていたのだけれど、体を悪くしてできなくなっただけでお願いしたいとか、庭の草がぼうぼうなんだけど、足腰を悪くしたので自分ではできないという方もいます。

あとは、障子や網戸の張り替えとか病院や買い物付き添いのほか、ちょっとした困りごとも多いですね。例えば、ホームセンターで棚を買ってきたはいけれど、自分では組み立てられないので手伝ってほしいとか、部屋の模様替えをしたので家具を移動してほしいなど。20分200円という比較的短い時間設定にしているのも、地域にはほんのちょっとしたことでも手伝ってほしいという人が常にいるので、『またお願いします』と気軽に利用してもらえたら、という思いからです」（佐藤さん）

自身も隊員として剪定などの支援をしている細貝さんは、「家でポットと

しているよりも体を動かして汗をかけたほうが気持ちがいいし、ありがたそう券がもらえるからちよつとした励みにもなる。でも、一番うれしいのは、活動後に利用者の方から『ご苦労様』と一杯のお茶を出してもらって、いろいろな話ができること。ただ、我々隊員も年々高齢化しているので、将来的には他の地域の助け合い隊とも連携しながら、人材の貸し借りをしていくことを考えていく必要があるでしょう」と話してくれた。

### 子ども・子育て世代が参加し 将来につながってくれたら

高齢者支援だけでなく、地域の子どもを健やかに育て、大人と子どもの顔の見える関係づくりを進めているのも、同協議会の大きな特徴だ。

例えば「子ども委員会」では、「塾でもない・学校でもない」をキャッチフレーズに、鶴二小の空き教室で「宿

題サロン」を実施。同会委員長の下河邊信行さんに活動の様子を聞いた。

「開催日は、毎週月・水曜日の午後3時から5時。指導者には1人が登録していて、最初の1時間は自分の席で宿題をし、元学校の先生が授業の進め方に合わせてプリントを用意しているの



子ども委員会の活動の様子（宿題サロン、流しうめん）



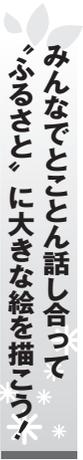
そのプリントをやります。4時を過ぎたら交流の時間。校舎の昇降口で卓球をやったり、いろいろなゲームも用意しているの、参加する子ども同士も異年齢交流や、我々との世代間交流をしています。保護者からは『とってもありがたい』との声をいただいていますし、宿題サロンの後に学童クラブに行っている子もいるんですが、『宿題サロン面白いよ、みんなも来ればいいの』と言ってくれたと聞きます。子どもたちがそういうふうには楽しんでいてくれるというの、我々指導者としてもすごく励みになっています」

また、現在はコロナ禍で休止中だが、未就学児童と子育てママの交流の場として親子そろって快適に過ごせる場として「子育てサロン」を提供。季節に合わせて水遊びや流しそうめん、餅つきなど、小さな子どもたちが自由に遊べる場などもつくっている。

ほかに、「防災委員会」では2年

に1回、鶴二小の全校生徒と一緒に避難訓練を実施。また、地域防災の担い手を広げるために、中学生を対象とした防災講習会や研修会を行っている。「環境委員会」では、サイエンス教室の開催や落ち葉拾いの呼びかけもしている。

こうした一連の活動について、「幼い頃から協議会の活動に触れて育った子どもたちが、『大人になったら自分も地域の役に立ちたい』という気持ちを持ってほしいという願いもあります」と細貝さん。将来への種まきとして、小・中学校の総合学習への参画も検討しているそうだ。



それにしても驚かされるのは、活動メニューの多様さとその活況ぶりだ。「楽しい行事などを次々と企画して事業が変わっていかないと、新しい人材

も出てきませんからね。それと同時に、地域ですから、活動の中で若い人たちに生きるすべを伝承していくことも我々の役目かと。ポイントは遊び心で、面白く楽しく参加していくことが大切だと思っています」と細貝さんは言い、さらにこう続けた。

「活動の進め方としては、毎月会議を開いていますが、侃々諤々かたかたがたとやっているとことん議論するんです。地域というのはいろいろな考えの人がいて、その中で合意形成を図ろうと思つたら時間がかかる。だけど、いったん合意すれば、みんなが同じ方向を向いて協力し合えるんです。この地域は鶴ヶ島出身の人はほとんどおらず、他地域から移り住んでいます。だからある意味、これからここで自分たちのふるさとをつくっていかう、という志のある人が集まっているとも言えます」

当日集まってくれた皆さんも口々に言っていたのは、「ここは住民一人ひ

のつながりができてうれしい」といった前向きな声の数々。また、細貝さんをはじめ、定年退職後に地域デビューした男性



役員の皆さん。手前中央が会長の細貝さん

## NPO法人 鶴ヶ島第二小学校区地域支え合い協議会

住民一人ひとりが自立自助の志を強め、知恵と力を出し合い、お互いに助け合う地域共助のカたちをつくりだし、新たな地域コミュニティを創造することを目的として活動。主な事業内容は、「防災委員会」による防災訓練・救急救命・車椅子講習、「福祉支え合い委員会」による講習会・セミナー、「子ども委員会」による宿題サロン・子育てサロン、「鶴二助け合い隊」による付き添い・掃除・修繕取付・お世話などの有償ボランティア、「環境委員会」による環境保全の取り組みなど。年会費500円。

●連絡先／〒350-2204  
埼玉県鶴ヶ島市鶴ヶ丘358-1  
鶴ヶ島第二小学校南校舎1階  
電話 049-298-7974

とりの意識が高い」ということ。他方本願ではなく、知恵と力を出し合いながら自分たちの手で人に優しく、安全で安心して暮らせる地域をつくろうと住民自らが主体的に取り組むことで、ここまで地域力を高めることができるのだ、と教えられたようにも思う。そして印象的だったのは、「活動に参加できて楽しい」「困っている人の役に立てる機会があるのがうれしい」「い

ろんな人と」の活躍も目立ち、活動に参加する中で「地域というのはこうやってみんな協力してつくり上げていくものだと実感し、自分自身もどんどん良いほうに考え方が変わってきている」との声も聞かれた。「コロナ禍で計画していた事業を中止したり、活動内容も制限せざるを得ない状況が続いていますが、できることから進めて、さらなる地域の絆を深め

ていきたい。私たちは夢見ているんです。大きな絵をみんなで描いて、とてもない夢のある想像をしながら地域の新しいカタチを創造していこうと。目指すのは、世界一住みよいまちづくりです」  
目を輝かせて力強くそう話す細貝さんに、皆さんも大きくうなずく。こんな地域の一員になりたいと思わせる、底知れぬ住民パワー。ぜひ見習いたい。

# 応援ありがとうございます！

## 「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会への取り組みや、コロナ禍での困りごと解決のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、年間を通じた地域の居場所づくり、地域の外国人サポート、食糧支援を介して地域社会の交流を深める活動を紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに続々アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

岩手県盛岡市

### 自宅の部屋を使用した

### 「安心できる地域の居場所」

暮らしを楽しむコミュニティースペース「はるみの」

助成金額 15万円

暮らしを楽しむコミュニティースペース「はるみの」は、代表者が農業体験の受け入れや作業場の軒下でのおしゃべりの場を通じて、地域コミュニティの必要性を強く感じ、

冬になると人は家にこもりがちになることから、年間を通

して集まることが出来る「居場所」として自宅を使用して開設されました。週2回+希望に合わせて開催しています。誰でも安心して過ごせる居場所として定着させるため、運営拡大に伴う設備補充と活動資金にしたいと、本基金の助成に応募されました。助成金は、高齢者の昇降補助用すり付き玄関台や底冷え対策のセンターラグ、自宅を使用することから活動場所と生活空間の仕切り用障子スクリーン  
の購入・設置、新型コロナウイルス感染症対策用品購入、水道光熱費等に充てていただきました。

室内での交流やいきいき百歳体操、オーディオコンサー  
ト実施など多様な要望に応えながら、近隣の方やひきこも

室内での交流（右）と、いきいき百歳体操（左）



体力のある若者が高齢者を手伝う場などニーズに合わせて活動の場を提供していきたい」と今後の展望を寄せていただきました。

また、「た  
くさんの経  
験や特技を  
持っている  
高齢の方の  
経験を若者  
に伝える場

りがちな若者、母子家庭の方等に利用されました。多くの人が「安心できる相談者」や「安心できる居場所」を求めていることを実感されたそうです。

これからも、夏場は「はるみさんの畑」での農作業、冬場は室内の「はるみの」で地域コミュニティの活動を継続していくとのこと。

日本語クラスの様子



地域の外国人に日本語学習サポートや困りごと相談のための居場所を提供したいと本基金の助成に応募されました。助成金を活用し、初級学習者の翻訳対応教科書として中国語や英語、スペイン語等を揃えることができ、講師の学習の手引き、予習にも役立ちました。また、日本語教育DVDや中古パソコンを購入でき、問題作り等で役立っています。

国籍の生徒をサポートする、という3つを柱に活動しています。

NPO法人日本語教育ネットワークは、①地域の外国人住民に日本語・日本文化・習慣を伝える、②ボランティア日本語講師を育成する、③公教育（中高）の現場に入り外

埼玉県川越市

## 地域の外国人に 日本語学習サポートや居場所の提供

NPO法人日本語教育ネットワーク

助成金額 15万円

埼玉県内の日本語教室がコロナ禍で閉鎖になる中、週2回日本語クラスを開催し続け、1日あたり約20人が楽しく学習したり、お話をしたりしています。職場で、「お疲れ様です」「お先に失礼します」など自然に会話ができるようになったと報告を受けると、講師も大変うれしくなるそうです。

定住者の親子、技能実習生の日本での緊張緩和と日本語サポート、生活や学習の不安の軽減、交流等ができました。地域の外国人住民は日本に早くなじもうと必死で日本語を学習していますが、地域住民の関心はまだまだ高まっていないようです。「コロナに負けず、日本が外国人の住みやすい街、住んで良かった街になるようサポート・交流を重ねていきたい」と意気込みを報告してくださいました。

愛知県豊川市

## 掲げる言葉は「大人も子どもみんなでワイワイおいしい」

ちな舎

助成金額 15万円

ちな舎は、軽度の障がいがある人、生きづらさを感じて

いる人の自立応援のためのシェアルーム、地域交流の場の提供、乳がん患者会の開催を行っている団体です。「子ども食堂&」として、コロナ禍による収入減の家庭の子どもたちへの食事と学習サポート、孤立世帯の支援が必要と考え、本基金の助成に応募されました。助成金は、食事提供の弁当容器や食器、衛生用品、新型コロナウイルス感染症対策用品の購入、食費や夏休み学習サポート費と水道光熱費、チラシ制作費等に活用していただきました。

「大人も子どももみんなでワイワイおいしい」という言葉を掲げ、小学生以下・65歳以上は無料で食事の提供・弁当配布、学習サポート、ワークショップ（物作り体験）を月1回開催。

感染対策を実施しながら、幼児から高齢者、障がいのある人など幅広い人たちが参加しています。また、引きこもりがちな若者もボランティアスタッフとして多数参加し、就職したいけれど自信がない、誰かの役に立ちたいなど、それぞれの思いで手伝い、自信につなげているとい



学習サポートの様子（右）と、お弁当（左）

# 「地域助け合い基金」 状況のご報告

うことです。  
「貧困、不登校、虐待…そういった環境に置かれた子どもはSOSを発信することは難しい。地域の目が子どもを救うことができるかもしれない。そして、子どもを支援する

皆様のご支援により全国各地の助け合いを助成している「地域助け合い基金」。

5月15日までの状況をご報告いたします。

(5月15日 当財団ホームページ開示時点)

◎寄付受付額

211件

3145万3336円

このほかに当財団より9千万円を供出

◎助成実行額

713件

1億1727万4045円

コロナ禍を乗り越え、地域共生社会を実現する活動のスタート・継続が促進されますよう、引き続き皆様のご支援・ご寄付をよろしくお願い申し上げます。  
(事務局長・内田)

だけでは何も解決しません。親(大人)への支援も必要です。(中略)誰もが『ここに居ていいんだ』と思える。居心地の良い温かい場所を目指します」と地域食堂「こども食堂&」の「&」に込めた思いを教えてくださいました。

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。



クレジットカード  
決済ページ



財団ホームページ内  
基金関連ページ

●基金に関する情報、  
およびクレジットカード決済は、  
QRコードもご利用  
ください!

基金に関するご意見・お問い合わせ

<地域助け合い基金担当>

電話：(03) 5470-7751 FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

# 「地域助け合い基金」で コロナ禍を乗り越えて共生社会へ

皆様からのご寄付をお待ちしています

## 1. 寄付金の使途

共生社会を推進するため、助け合い活動の支援に活用させていただきます。

助成の対象は、地域で暮らす人同士の助け合い活動であり、新たに団体を設立する場合のほか、新たに活動を広げる場合やコロナ禍に対応して特別な助け合い活動を行う場合も含まれます。

高齢者、子ども、認知症、障がい、生活困窮の方々、刑余者、外国人、ケアラーの支援ほか、分野は問いません。ただし、日本国内の活動に限ります。

本基金は、支援したい市区町村（区は東京都の特別区）をご指定いただけます。

## 2. 税制上の優遇措置

当財団にいただいたご寄付は、税制上の優遇措置の対象となります（当財団発行の領収証が必要となります）。

## 3. ご寄付の方法

### (1) 銀行振込によるご寄付

三井住友銀行 浜松町支店（普通） 口座番号 7859452

三菱UFJ銀行 浜松町支店（普通） 口座番号 0095446

（口座名義 ※いずれも同様）

公益財団法人さわやか福祉財団 地域助け合い基金

※銀行お振り込みの場合は、送金者の情報がカタカナ表記のお名前のみとなるため、当財団発行の領収書が必要な場合や地域の指定をご希望の場合は、お手数ですが「寄付申込書」を当財団宛お送りください。当財団へのお電話でも承ります。

### (2) 郵便振替によるご寄付

（口座記号番号） 00110-7-709627

（加入者名） 公益財団法人さわやか福祉財団

※通信欄に、ご指定がある場合の市区町村名（区は東京都の特別区）と、ひと言応援コメントなどをご記入ください。また、手数料不要の払込取扱票をご用意いたしますので、お申し出いただければ郵送いたします。

### (3) クレジットカードによるご寄付

前ページのQRコードもしくは当財団ホームページよりお申し込み下さい。

助成応募については、当財団ホームページをご参照ください。

「寄付申込書」「パンフレット」なども、ホームページからダウンロードできます。

<寄付・助成のお問合せ>  
地域助け合い基金担当

電話：(03)5470-7751 FAX：(03)5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

# 老いの暮らしを創る

## 終の棲み家に翔びました

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

このタイトルは俵萌子さんの著書『終の棲み家に翔べない理由』から頂きました。俵さんは子ども

に頼らず自立した老後を送りたいと、100カ所以上の様々な老人ホームを取材し、終の

棲み家を求め続けました。結局はホーム入居を諦めることになったのですが、私は先月、終の棲み家に、翔びました。住まいのカテゴリーで言えば、住宅型の有料老人ホーム。クリニックが併設されている高齢者マンションといったところです。

これまで老いの住まいに関して、元気なうちは自宅で過ごし、病気や介護が必要になったら病院か施設に入る、という考え方が主

流でした。実際、多くの人が出来るだけ長く自宅で暮らしたいと願い、国も増え続ける医療費や介護費削減のために、病院から在宅へ、施設から在宅へ、という方向をますます加速させています。

「今、お一人様でも最期まで自宅で暮らせるという人がいるけど、どう思います?」と、福祉関係の友人から聞かれたことがあります。「そうねえ。たとえそうした仕組みができたとしても、私はダメね。いくら必要なサービスが必要な時に届いたとしてもその他の時間は一人ですよ。誰もいない部屋でテレビだけがお友達。ただ天井向いてベッドに寝ているなんて暮らし、私は無理だわ」と申しました。





介護が必要になった場合、私はただ必要なサービスが届くだけでなく、周りに人の気配や話し声がほしいのです。たとえ仲間に入れなくとも、部屋の空気が動いていると感じられる状況に居たいのです。そこを担うのが住民の力。公的なサービスと共に地域住民の温かい支えがあれば、点としてのサービスが面に拡がっていき在宅の暮らしに膨らみと厚みが出てきます。しかし私は、きわめて助けられ下手。面倒をかけて申し訳ないという気持ちの方が勝ってしまい、落ち着かないのです。むしろ重荷になってしまおうと言った方がいいでしょう。地域と関わりなく職場だけと繋がってきたこれまでの暮らしが、地域と関わることに怖気づいているのかもしれない。これは善し悪しの問題ではなく、性格、つまり性分なのです。多くの人が望む最期まで自宅で暮らせる仕組みを、官民連携で整えるこ

とは何より大事と考えますが、私自身のこと置き換えてみると、在宅の暮らしこそ一番という国をあげての風潮には、いささかの違和感を持っていました。従って私は、施設か在宅かの二者択一だけでなく他の道もあるのではと考え、関西でお一人様の友人たちと同じマンションに住む「友だち近居」という試みをしました。しかし関西での暮らしは根っこをもぎとられる空虚感に苛まれ、結局東京に戻りました。私の老いの住まい選びは振り出しに戻りました。私自身も年を重ねました。そして今、出した結論が高齢者マンション、つまり施設で暮らすということです。この選択が良かったのかどうか全くわかりません。しかし自分で出した結論です。受け入れるという姿勢は持ち続けるつもりです。どんな暮らしになるのでしょうかねえ。追々、お話し致しましょう。



(むらた さちこ) 立教大学英米文学科卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。報道番組のリポーターや社会性のある硬派の番組を中心に担当。1990年、解説委員に就任。NHKスペシャル「あなたが寝たきりになった時」、NHKモーニングワイド「高齢化社会」のキャスター他、多くの番組を担当。2004年、解説委員を退任後も高齢者問題の第一人者として活躍中。

# ～助け合いの地域づくりにお役立てください～

## いつでも誰でも行ける場所を広げよう! 『居場所ガイドブック』

誰もが自分らしく過ごせる共生型常設型居場所を地域に広めましょう。

『居場所ガイドブック』は、居場所のつくり方や活動に対する支援のあり方、全国の好事例が満載です。地域での居場所立ち上げの勉強会などに、どうぞご活用ください。

### 【主な内容】

- 1章 居場所ってなに? 2章 居場所のつくり方
- 3章 居場所の事例 (21事例)
- 4章 活動に対する支援のあり方
- 5章 「新しい総合事業」(通いの場)の活用

◎本体無料。

6冊以上の場合送料のご負担をお願いいたします。

『居場所ガイドブック』は当財団ホームページからダウンロードもできます。大人数での勉強会等にご利用ください。

(当財団HP) <https://www.sawayakazaidan.or.jp>

トップページから、「マガジン」→「ライブラリー」にお進みください。



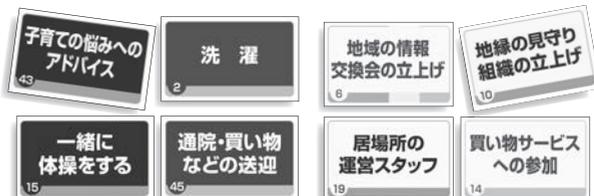
## 【新・助け合い体験ゲーム(実践編)】

解説書



「新・助け合い体験ゲーム」は、地域での住民主体の助け合いを体験できるゲームキットです。

住民勉強会やワークショップで、普段助ける側の人も助けられる体験ができ、ニーズや担い手の掘り起こしにも役立ちます。アイスブレイクにも最適です!



◎1,100円(消費税込)+送料

近隣助け合い体験カード

担い手の掘り起こしカード

いずれもお問い合わせは当財団まで 電話 (03) 5470-7751

メール [mail@sawayakazaidan.or.jp](mailto:mail@sawayakazaidan.or.jp)

# 新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、  
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、  
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。  
特に現在は、全国自治体が新地域支援事業で取り組んでいる  
住民主体の助け合いの地域づくりを強力に支援しています。  
どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

## ● 新地域支援事業・助け合いの地域づくり

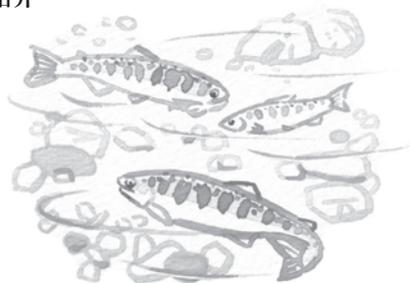
北から南から 各地の動き

## ● その他の財団の活動 など

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・

ご寄付者の皆様のご紹介





## 新地域支援事業・ 各地の動き

(2022年4月1日～30日)

- 全国各地で、  
推進の支援をしています
- 活動の一部を紹介しています

SCⅡ生活支援コーディネーター

### 第2層情報交換会に協力

#### 枚方市（大阪府）

26日／枚方市は、小学校区45校区のうち42校区で第2層協議体が設置されている。第2層SCは住民中心で、地域包括支援センターや校区福祉委員会、校区コミュニティ協議会等が担っている。第6圏域（校区）は住民が活発

に活動しているが、包括や第2層SCは、助け合いを進める上で住民同士の情報交換の場の必要性を強く感じていた。

昨年11月に行われた大阪府の「本音で語ろう！情報交換会」の際、枚方市に第2層協議体同士の情報交換の場がないが、まず包括第6圏域内（4協議体）で情報交換会を行いたいのので財団に協力してほしい、と同市の第6圏域のSCから相談があり、情報交換会を企画。コロナの影響で2月から延期になっていたが、この日実施した。今回は、第2層SC2名がそれぞれ担当する第2層協議体同士の情報交換会。次に、市や他の包括とも連携し、市内に情報交換の場を広げていきたいと動き始めた。

情報交換会には、第2層SCの一人、永濱旭氏から呼びかけて市の健康づくり・介護予防課（生活支援体制整備事業担当課）も参加してもらった。財団からは、市全体の目指す地域像の共有

と、住民同士の情報交換の場の必要性について伝えた。そして圏域ごとやいくつかの圏域をまとめたブロックでこのような情報交換の場をつくっていきましよう、と呼びかけた。また、住民、行政、包括など地域づくりに関わる多様な人々が一体となって助け合い、健康づくりに取り組んでいるまちとして、他市町村へも枚方市の情報を提供したいと伝えた。

次のステップとして、市内を4つのブロックに分け、第6圏域を含む12小学校区の情報交換会を企画する予定。今後も関係者と連携して支援していく。

（目崎）



美里町（埼玉県）

25日／美里町松久地区では第2層協議体が立ち上がっている。この日、2回目の協議体会議が行われ、軌道に乗るまでの運営支援として、会議終了後、第1層SCとオンラインでつなぎ、今後の進め方について当財団がアドバイスを行った。

前回の協議体では目指す地域像を話し合い、「サロンを中心としたつながりづくり」「協議体の周知（チラシ作成）」「買い物支援」の3つについて具体化に向けた話し合うことが決まっていた。この日は、それらについて話合った。

「サロンを中心としたつながりづくり」では、既存サロンのマッピングを行い、サロン空白地帯を把握することから始めた。その中で、サロンは自治会ごとに立ち上がってはいるものの、コロナ禍で実質何年も休止しているサ

ロンがあることがわかり、新たに立ち上げるのではなく、休止しているサロンの再開から始めてみてはどうかとの話になった。当該自治会は、コロナ禍で主催者としてサロンを開催することに強い不安があるため、サロンをやりたい人、参加したい人が任意に行う形式にし、協議体委員が中心となることを検討していく。サロンまでの移動手段が確保できないことについては、まずは再開に重点を置き、歩いて来られる人を対象に始めてみることを財団か



ら勧めた。

「協議体の周知（チラシ作成）」については、SCが作成した案を提示するに留まったが、活動と協議体との周知のために別々にチラシを作成するよりも、具体的な活動が立ち上がった際にその周知も兼ねて協議体の説明を入れたチラシを作成したほうが、枚数も少なく住民にも伝わりやすいのではないかと財団から勧め、次回協議体で提案することとなった。

また、協議体委員より、買い物支援が必要な地域があり、すでに同町の大沢地区に来ていた移動販売車に、松久地区にも来てもらいたいとの話があった。これについて、SCが移動販売業者の空きを確認したところほぼ埋まっていたことから、さっそく依頼したいとのこと。協議体委員がニーズを把握しているのであれば、まずは依頼してみ、実際の様子を協議体で共有し、今後移動販売をどのように活用できるのか、例えば、移動販売とサロンを組

み合せて開催するなど、さらなる活用方法を話し合うことを財団から勧めた。SCから、デイサービスの空き車両を活用した買い物ツアーなどについて情報を教えてほしいと財団に相談があったため、近隣市町村ではデイサービス事業者がコロナ禍により空き車両の提供を止めているという情報を伝え、引き続き情報収集を続けるようアドバイスした。

同地区の協議体が軌道に乗るまで支援を続けていく。  
(岡野)

### 【西海市(長崎県)

14日/昨年度から個別支援で関わっている西海市で、今年度最初の第1層協議体が開催され、当財団が依頼を受けてオンラインで助言を行った。

昨年度事業実績報告、今年度の事業計画の報告・共有の後、今年3月に行われた地域助け合いミニフォーラムと、その後の地域助け合い勉強会、そして今後に向けての議論を行った。

一昨年度まで、第1層協議体は会議

を年3回行う程度だったが、昨年度初めて住民に働きかけるミニフォーラムを先行。コロナ禍で日程を変更しながら、規模を縮小しハイブリッド方式で西海地区中心に行い、住民等85名が参加した。



今回の協議体では、ミニフォーラム時の参加者アンケートを共有。「有償ボランティアが必要だと思う」「助ける人、助けられる人がそれぞれ遠慮な

う」など、紹介した事例に興味を持った人も多く、「住民の意識改革」「自治会に情報を下ろす、指示、呼びかけ」などフォーラムに参加していない住民への理解を広げたいという声もあった。協議体委員からは、もっと広げていこうという意見以外に、「まだよ

く分らない」という意見も聞かれた。財団からは、初めてのフォーラムで完璧な理解まではいかずとも、反応してくれた人たちを生かすために、①有償ボランティア等の助け合い創出につながる内容、または、地区への理解や参加を広げたいという声を生かす内容、②第2層協議体づくりにつながる内容として勉強会で各地への働きかけを進めていくのはいかがでしょうかと提案した。

地域助け合い勉強会は、4月以降月1回行うということは決まっていたが、狙いと対象、そして内容を参加者で協議することが大切だという点も伝えた。反応が良かった協議体メンバーを中心に、さらなる住民への働きかけと、そこからキーパーソンを見つけていくことが理解者を増やし、助け合いの地域づくり推進につながるが見えた。

(鶴山)

(本稿は、岡野貴代、鶴山芳子、

目崎智恵子)

# ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2022年4月1日～4月30日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合があります。ご了承ください。

## さわやかパートナー個人 (86件)

(都道府県別50音順)

宮城県	篠原 宏子	鈴木 章	寺井 正也	佐野 圭子	福岡県	福岡県
内海 裕一	五十嵐 紀男	原 武二郎	長尾 立子	佐野 美樹子	岩井 順子	猪山 勝利
佐藤 かつよ	小関 和夫	渡辺 誠	長吉 多佳子	清野 行雄	佐藤 須美子	古賀 秀隆
色摩 美津代	佐伯 昌子	東京都	林 幹高	角井 佑子	三重県	大分県
渡部 孝雄	佐伯 美穂英	稲川 寿子	福島 治美	西島 康二	西村 美紀子	高木 佳奈枝
山形県	酒井 勝男	大島 勝喜	細矢 博康	平野 潤一	京都府	長崎県
阿部 良二	下川 初江	片桐 弘之	宮部 敬子	新潟県	西村 美紀子	高木 佳奈枝
福島県	タニツケイコ	神谷 武秀	山田 秀之	河田 瑠子	中谷 武雄	比嘉 玲子
阿部 洋子	中村 清子	菊地 みつよ	山寺 博丸	長谷部 義子	大阪府	
茨城県	細井 親子	木村 智都子	山本 孝幸	富山県	岡 保正	
佐藤 真智子	向所 ふみ代	木村 大哲	吉岡 高志	棚田 美智代	中田 壽子	
栃木県	森戸 伸行	下川原 直明	和久井 良一	福井県	兵庫県	
高柳 慎八郎	鈴木 慶子	岡本 淳	渡辺 由美子	北畑 英子	岡田 泰信	
群馬県	千葉県	神奈川県	神奈川県	小野 昭男	桑山 信子	
小山 範之	小澤 利政	鹿野 義量	恩田 實	愛知県	広島県	
			佐伯 知美	大島 嗣雄	島本 幸子	
				齋藤 みどり	徳島県	
				菅 文夫	酒井 やよい	

## さわやかパートナー法人 (5件)

(50音順)

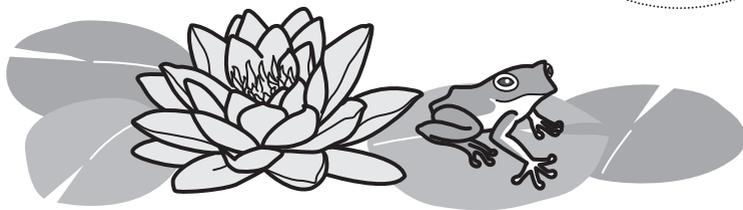
NPO法人青葉台さわやかネットワーク  
 医療法人社団潤康会芝パーククリニック  
 太平洋工業株式会社  
 株式会社中村塗装店  
 NPO法人ゆいの会

## 一般ご寄付 (3件)

(50音順)

荒海・木村 勲 (2万円)  
 高橋 愛子 (2万円)  
 和久井 良一 (5万円)

# みんなの広場



みんなが「幸せ」と  
答えられるように

よっちゃんさん 43歳

清水理事長の巻頭言は、いつも大変参考になります。また、とっても読みやすく心に訴えかけられます。毎日の暮らしや、仕事においてもいろいろと振り返るきっかけにさせてもらっています。月に1回（笑）。

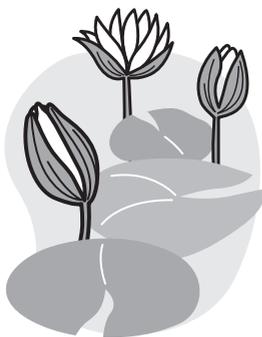
3月号の医療的ケアが必要な子どもたちは、「そうなのか」と、全く知らないことでした。言われてみれば当然のことです。恥ずかしながらも「障がい」と大きく括ってしまったり、あるいは病気なのだから学校で学べなくても仕方ないと、どこか無意識に思っている自分がありました。お母さんは本当に大変、知識不足で

すね。

4月号の「幸福度」も心に訴えかけられました。自分があるからこそ他のことも考えられる。みんなが幸せだと答えられるように、少しずつでもできていけばと思います。

（清水理事長より）

こちらこそ大変励みになるお言葉、ありがとうございます。  
みんな笑顔を広げていきましよう！





『さあ、言おう』投稿募集

## あなたの意見を社会へ生かそう

『さあ、言おう』は皆様の声を社会につなげる  
問題提起型情報誌です。

### ぜひ皆様の声をお寄せください

『さあ、言おう』では、取り上げたテーマに対する読者の皆様からのご意見・ご感想、あるいは普段気になっているテーマに基づいた体験談や提言などを随時募集しています。

#### 常設テーマ

- 地域の助け合い活動について
- 助け合いの地域づくりについて
- いきがい、社会参加について
- 居場所や地縁組織、NPOの活動について
- 新地域支援事業について
- 生き方について など

#### 投稿の方法

- 字数や回数制限はありませんが、掲載にあたっては誌面の都合上、編集要約する場合があります。あらかじめご了承ください。
- 一般投稿は形式は問いません。本誌添付の投稿ハガキなどもご自由にご利用ください（原稿はお返しできません）。
- 投稿は、事情が許す限り本名でお願いします。  
ただし、掲載時には匿名、あるいはペンネームの使用も可能ですので、その旨お書き添えください。
- 投稿時には、お名前ほかに、ご住所、連絡先お電話番号をご記入ください（内容により質問させていただく場合があります）。性別、年齢もよろしければお書き添え下さい。大変参考になります。

#### 送付先

〒105-0011  
東京都港区芝公園2-6-8  
日本女子会館7階  
公益財団法人さわやか福祉財団  
『さあ、言おう』編集部宛  
FAX (03) 5470-7755  
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp



私たちはふれあいあふれた地域づくりを支援しています

## さわやか福祉財団の活動をぜひご支援ください。

『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人  
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人  
年会費  
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の控除対象となります。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の控除対象となります(所得税の寄付控除額の上限は所得の40%-2000円)。

一般ご寄付を  
いただく場合の  
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますのでお申し出いただければご郵送します。

\*いずれもお問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。(mail@sawayakazaidan.or.jp)

表紙絵

はり絵・池田げんえい



「おうちにかえる」

編集後記 ●「挑む！ 我らの地域づくり」は、茨城県つくばみらい市。住民と一緒に動くSCと、志ある活動者たち取材しました(P4~)。●「活動の現場から」は、埼玉県鶴ヶ島市のNPO法人。組織の規模や運営はさすがです。各委員会の活動内容も充実し、地元住民の支持を広げています(P11~)。●「いきがい・助け合いサミット in 東京」は、会場参加とオンラインによるライブ配信のハイブリッドで開催します。参加お申し込みは8月1日までですが、定員に達し次第締め切りとなりますので、お早めに！(裏表紙)

助け合いを  
広げよう!



高橋  
紘士

最近、ごちゃまぜ型の活動や  
事業が拡がっている。

制度に囚<sup>とら</sup>われれない

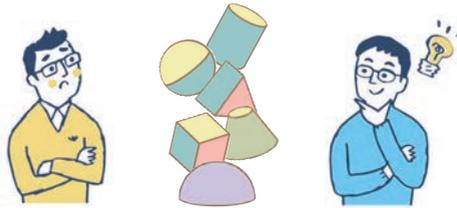
素晴らしい成果をあげている。

ところがごちゃまぜ型を

嫌っているむきも少なくない。

このような硬直した縦割思考を

どうしたら克服できるのだろうか。



- 東京通信大学名誉教授、(一社)高齢者住宅協会顧問  
常勤職は卒業しましたが、まだ、仕事が残っています。「住まい」を包括ケアに位置づける。重度心身障害児・者の施設の検討。近刊の『地域包括ケアを現場で語る』(木星舎)で前者については論じましたが、地域共生と包括ケア完結のための必須のテーマです。

## 「さあ、お」6月号

通巻346号 2022年6月10日発行  
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい  
イラスト すずきひさこ  
福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子  
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団  
〒105-0011  
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階  
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755  
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp  
https://www.sawayakazaidan.or.jp  
Printed in Japan

住民主体の地域共生社会の実現に向けてジャンプしよう!

# いきがい・助け合い サミット in 東京

参加お申し込み受付中

開催日 2022年 9月1日(木)・2日(金)

会場

グランドプリンスホテル新高輪・  
国際館パミール

住 所: 東京都港区高輪3-13-1  
最寄り駅: 新幹線・JR線・京急線 品川駅(高輪口)  
都営地下鉄浅草線 高輪台駅



開催形式

会場参加・  
オンラインによるライブ配信併用

※コロナ禍が収束していても、併用で開催します。

主な内容(予定)

- 全体シンポジウム
- 分科会 第1部から第3部まで37分科会
- ポスターセッション
- 全体発表会 ● 大交流会 など

定員

会場参加1,500名 オンライン視聴3,000名

主な対象

生活支援コーディネーター、協議体構成員、地方自治体、社会福祉協議会、地域包括支援センター等の地域づくり関係者、国・関係機関・NPO・民間団体の関係者等、助け合い支え合う地域づくりに関係する方、その他関心を持つ一般住民 など

参加費

資料代 2,000円/1人(税込。会場参加、オンライン視聴共)  
大交流会 別途 3,000円/1人(税込)

お申し込み  
締め切り

8月1日(月)

お問い合わせ 電話:(03) 5470-7751 (事務局 内田・徳間)

◆開催情報は財団ホームページでもご覧いただけます。▶ <https://summit.sawayakazaidan.or.jp>